

中川翔子さんが手術した耳下腺腫瘍

良性 8 割も痛み・麻痺があるタイプは要注意

タレントの中川翔子さん（39）は、5年前に左耳の下のしこりに気付き、徐々に大きくなったため2023年1月に耳下腺腫瘍の手術を受けた、と昨年末に公表しています。

耳下腺腫瘍とは聞きなれない病気ですが、どんな種類の腫瘍があり、どのような症状があって、手術が必要なのでしょうか。

実は私も35年ほど前、アメリカ留学中にふと右耳の下を触ったときに十円玉大の腫瘍があることに気付きました。触ると少し動く気配がする腫瘍以外、痛みも他の症状ありません。家庭医の紹介で頭頸部（けいぶ）外科の専門医を受診し、超音波検査と穿刺（せんし）細胞診（細い針で腫瘍を穿刺し、腫瘍細胞を取る）検査を受けました。多形腺腫の疑いで、耳下腺の皮膚よりの半分を取る手術（浅葉切除）を受けました。術後病理診断も良性の多形腺腫でした。手術後、皮膚に少ししびれがありますが、再発や神経麻痺（まひ）はありません。

耳下腺は唾液腺の一つで唾液を分泌しています。唾液は食べ物の消化を助け、口腔（こうくう）内の衛生を担っています。

唾液腺は耳下腺以外に、顎の骨の内側にある顎下腺や舌の下にある舌下腺があります。耳下腺が最も大きな唾液腺で、左右の耳の前から下にかけて皮膚の直下にあります。おたふく風邪で腫れるのが耳下腺です。

耳下腺腫瘍は頭や首にできる腫瘍の3%前後で、珍しい腫瘍です。発生頻度によると10万人に1~2人といわれています。耳下腺腫瘍の8割が良性腫瘍です。さまざまな腫瘍がありますが、多形腺腫がその70~80%を占め、最も多い腫瘍です。

耳下腺腫瘍の残り2割は悪性（がん）です。耳下腺がんにも多数の種類があり、それぞれにさまざまな悪性度があります。ただ、大きく予後の比較的良い悪性度の低いタイプと、予後が悪い悪性度の高いタイプに分けられます。

■ 高齢者ほど悪性度は高く

耳下腺腫瘍の発症は年齢や性別で異なります。良性腫瘍は比較的若い人に多くなっています。一番多い多形腺腫は40代によくみられ、女性が男性の2倍以上多くなっています。一方、悪性度の低い耳下腺がんは50～60代に多く、悪性度の高いがんは60～70代が中心で、高齢者ほど、がんの悪性度が高くなります。悪性度が高くなるほど、男性の比率が上がります。

耳下腺腫瘍はたいてい腫瘤を触れて初めて気付きます。良性腫瘍は数カ月から数年かけて、ゆっくり大きくなり、腫瘤を触れる以外ほとんど無症状です。

一方、がんの場合は痛みが出ることがあり、腫瘍の動きも悪くなります。また、耳下腺の真ん中に顔面神経があるため、がんが進行すると顔面神経の麻痺症状（顔の片方が動かない、目が閉じられない、口元から水がこぼれるなど）が出ることがあります。

逆にいえば、痛みや神経麻痺、頸部のリンパ節の腫大があるとがんを疑います。

治療は手術です。完全に取り切らないと良性腫瘍でも再発します。無症状の良性腫瘍は積極的には手術をしません。しかし多形腺腫は長期間放置すると、がん化することもあり、手術を勧めます。

耳下腺がんも手術以外に確立した有効な治療はありません。ただ最近では、がんゲノム医療で遺伝子を調べ、特定の遺伝子変異を認めた場合、それにあった治療薬が使えるようになりました。